

日本の捕鯨の伝統と食文化を次世代へ

全国鯨フォーラム 2016東京

2016年5月31日(火)
憲政記念館講堂



全国鯨フォーラム2016東京

開催日時 2016年5月31日(火)14:00~17:00

会場 憲政記念館講堂

開催目的

- 捕鯨に縁のある全国の自治体及び捕鯨関係者の連携を深めること
- 商業捕鯨再開に向けた国内世論を喚起すること
- 捕鯨文化、鯨食文化の継承、普及啓発を図ること
- 鯨類科学調査への理解の浸透を図ること

主催 日本捕鯨協会／捕鯨を守る全国自治体連絡協議会

共催 (一財)日本鯨類研究所／共同船舶㈱

後援 水産庁

プログラム

- 13:30 受付・開場
- 14:00 開会 司会 岩崎佑子
主催者挨拶 日本捕鯨協会会長 山村和夫
来賓挨拶 水産庁長官 佐藤 一雄
- 14:10 基調講演 IWC日本政府代表 森下丈二 (50分)
演題「商業捕鯨再開に向けての問題点と処方箋を考える」
- 15:00 質疑応答 (10分)
- 15:10 休憩 (10分)
- 15:20 パネルディスカッション (85分)
パネリスト 蝦名大也釧路市長、亀山紘石巻市長、石井裕南房総市長、
三原勝利太地町議会議員、中尾友昭下関市長、
大西倉雄長門市市長、坪井泰助新上五島町議会議員
コーディネーター 稲垣文子
テーマ「捕鯨地域の伝統と文化～今後の展望」
- 16:45 東京宣言採択(10分)
- 16:55 閉会挨拶 捕鯨を守る全国自治体連絡協議会副会長 中尾友昭
- 17:00 終了／懇親会受付(17:30～捕鯨の伝統と食文化を守る会)

講師プロフィール

森下丈二 東京海洋大学教授／国際捕鯨委員会(IWC)日本政府代表



1957年生まれ。1982年京都大学農学部卒業後、農林水産省入省。米国ハーバード大学行政政治学大学院修了。在ワシントン日本大使館勤務。1999年より資源管理部遠洋課捕鯨班長として捕鯨問題を担当し、国際捕鯨委員会(IWC)の日本政府代表団のキーマンとして国際交渉の最前線で活躍。2013年からはIWC日本政府代表を務める。2014年より水産総合研究センター国際水産資源研究所所長。2016年より東京海洋大学教授。

全国鯨フォーラム2016東京 東京宣言(案)

四方を海に囲まれたわが国では、5000年以上前から鯨を貴重な食料として利用してきた。現在でも、全国各地で捕鯨文化と鯨食文化が継承されている。

一方、1982年に国際捕鯨委員会において商業捕鯨モラトリアムが採択され、日本は1987年から調査捕鯨を開始し、科学的情報の収集に努めているが、モラトリアムは未だ解除されていない。

商業捕鯨の停止が長引く中、鯨を食べた経験のない世代が増え続け、捕鯨文化と鯨食文化の継承が極めて危機的な状況にある。

そのような中、2011年には東日本大震災により、わが国の主要な捕鯨地域が未曾有の被害を受け、今もなお復興の途上にある。

こうした状況に鑑み、捕鯨に縁の深い全国の自治体が一丸となり、捕鯨文化と鯨食文化の継承を目的に、全国鯨フォーラム等を毎年各地で開催している。

本日、全国から捕鯨に縁の深い自治体をはじめ、捕鯨関係者が東京に一同に会し、次の通り宣言する。

1. 長い歴史の中で育まれてきたわが国固有の捕鯨の伝統と鯨食文化は、先代から引き継いだ誇るべき財産であり、これを次世代に継承することは我々の使命であることに留意し、来年以降も全国鯨フォーラムを継続していく。
2. 東日本大震災により未曾有の被害を受け、今もなお復興途上にある我々の同志の捕鯨地域を引き続き支援していく。
3. 沿岸小型捕鯨によるミンク鯨の捕獲枠の確保は、沿岸捕鯨地域の住民にとって長年の悲願であり、全国鯨フォーラムの最優先事項として早期解決を求めていく。
4. 日本が実施している南極海及び北西太平洋における鯨類科学調査の継続実施を強く支持し、その成果や意義を広く国民に周知する。
5. 世界人口の増加による将来の食料不足に備えるため、海洋生物資源の持続的利用は重要な施策であり、将来の有事に備えるためにも、捕鯨技術の伝承に努める。
6. 鯨食経験のない世代が増え続けている中、学校給食等によって若い世代に鯨食を増大させることが捕鯨文化と鯨食文化の継承にとって緊要となっていることに鑑み、学校給食への鯨肉供給をさらに拡充する。

以上

2016年5月31日
捕鯨を守る全国自治体連絡協議会
日本捕鯨協会
他捕鯨関係者一同

捕鯨を守る全国自治体連絡協議会加盟市町村

【北海道釧路市】



全国鯨フォーラム2009釧路

釧路市は、昭和20～30年代半ばまでクジラの捕獲頭数が全国1位に輝く日本有数の捕鯨基地でした。

商業捕鯨モラトリアム発行後、捕鯨の歴史が一旦途絶えますが、平成14年北西太平洋鯨類捕獲調査の一環で始まった釧路沖調査捕鯨を契機に、官・民で組織した「釧路くじら協議会」が中心となって、鯨食文化の普及・継承と調査の副産物である鯨肉の消費拡大に取り組むなど、「くじらのまちづくり」を進めています。

また、平成21年には「全国鯨フォーラム2009釧路」を開催し、釧路市における捕鯨の歴史や特徴ある鯨食文化を全国に発信しました。

【北海道網走市】



網走沖にて撮影 網走市観光協会提供

網走と鯨の関わりは、7～8世紀に栄えたオホーツク文化最大の遺跡・網走市モヨロ貝塚から鯨の骨で作られた道具が多数発掘されており、この地が網走と呼ばれる遥か昔からあったことがうかがえます。

網走での近代捕鯨は、1915年に始まり、最盛期の1950年代には7社の捕鯨会社が操業し一大産業を形成していましたが、資源の減少などで1962年には大型捕鯨会社は全て撤退し、その後は、ミンク鯨捕鯨を主体とする小型捕鯨業者が操業を続けていました。

しかし、商業捕鯨モラトリアム決議により、1987年を最後にミンク鯨を対象とした商業捕鯨を中断せざるを得なくなり、市内の小型捕鯨業者はIWC管轄外の鯨を対象とした商業捕鯨に従事し、網走の捕鯨文化・鯨食文化を絶やさぬよう活動を続けています。

【北海道浜中町】



浜中町の漁業は、浜名湾や琵琶瀬湾等の海岸線、火散布沼や藻散布沼の湖沼、近海の寒暖の海流が交錯する沿岸漁場により、豊富な水産資源に恵まれてきましたが、資源状況の低迷、輸入水産物や消費の低迷による魚価安等の厳しい状況にあります。こうした中、大正15（1926）年に東洋捕鯨株式会社の霧多布事業場の誘致が行われ、これを機に霧多布と浜中駅間の道路の改修がされ、輸送も馬車から自動車へと転換されました。また、捕鯨船の入港・関連事業・労働者の増加により、町の繁昌、捕鯨付加税は、町財政をうるおすことに繋がりました。

【北海道乙部町】



乙部町での捕鯨は、北海道渡島半島日本海側を中心として、昭和24年から昭和31年までの8年間続けられ、捕獲頭数については、ミンク鯨、ツチ鯨を合わせて年間約20頭の捕獲がありました。

平成11年からツチ鯨を対象とした小型捕鯨が再開されましたが、当初は乙部漁港での水揚げは行われず、主に捕鯨船の休憩等に利用されている状況がありました。現在では、捕獲後に乙部漁港まで曳航したツチ鯨を、クレーン車を使って水揚げを行ない、函館の鯨体処理場まで運搬しております。

【岩手県山田町】



マッコウクジラの骨格標本

山田町は岩手県沿岸のほぼ中央に位置し、山田湾と船越湾の二つの湾を擁しており、湾内ではカキ、ホタテ等の養殖が営まれています。かつて山田湾の北部（大沢地区）には捕鯨基地があり、山田町は捕鯨の町として一時代を築きました。

IWC（国際捕鯨委員会）による商業捕鯨の規制とともに昭和63年、山田の捕鯨は閉幕。その直前に捕獲されたマッコウクジラの骨格標本（17.6メートル）が平成4年開館の町施設「鯨と海の科学館」に展示されていましたが、東日本大震災津波により「鯨と海の科学館」は壊滅的な被害を受け、多数の資料は流出しましたが、骨格標本は流出を免れ、現在は専門家の先生方やボランティアの皆様の協力を得ながら開館に向け準備を進めております。

【宮城県石巻市】



鯨まつり（昭和30年頃の鮎川）

牡鹿半島は、三陸リアス式海岸の南の端に位置し、複雑に入り組んだ海岸線が入江ごとに天然の良港を形成し、古くから漁業を生業とする人々が暮らしております。その最も先端部にあるのが捕鯨基地「鮎川」であります。

本市の鮎川で捕鯨が行われるようになりましたのは、1906年にノルウェー式の近代捕鯨技術を携えて、山口県の東洋漁業株式会社が事業所を構えたときのことです。

その後、1960年代をピークとして国内トップの捕鯨基地として栄えました。1985年ごろ、当時ミンク鯨の捕獲が解禁となる4月1日は鮎川周辺のほとんどの家庭の食卓に鯨の刺身が登ったものです。「鯨」は石巻のごく普通だけれども欠くことのできない大切な食文化なのです。

【宮城県女川町】



女川町において、捕鯨は盛んであった漁業の一つであり、町に多くの恩恵を与えてくれた伝統である。平成7年度より、この捕鯨文化の再興と「鯨の食文化の普及」を目的として、鯨類捕獲調査副産物であるミンククジラ、イワシクジラの町民頒布及び小中学校、保育所給食への提供を行っていた。本事業は、東日本大震災の影響により平成23年から平成25年までは実施を見合わせていたが、平成26年度より事業を再開し、鯨資源の持続利用の積極的な推進を図っている。

鯨肉の町民頒布会

【千葉県南房総市】



道の駅に設置されている
シロナガス鯨骨格標本

南房総市の和田漁港は全国に5箇所ある沿岸小型捕鯨基地のひとつ、関東では唯一の捕鯨基地です。房総の捕鯨は江戸時代の鋸南町勝山から始まり、その後、館山、白浜、千倉を基地として行われ、昭和24年には外房捕鯨株式会社が南房総市和田で設立されツチ鯨漁を開始しました。例年、6月20日から8月末までの房総沖の漁期中にツチ鯨26頭が水揚げされています。

鯨肉は、伝統的に食してきた白浜、千倉、和田の鮮魚商、加工業者、行商人、一般の消費者に販売され、特に鯨肉の干物である「くじらのタレ」は南房総に江戸時代から伝わる伝統的な保存食品です。

「和田浦くじら食文化研究会」によるイベント開催や地元小中学校での料理実習教室などを通じ、鯨と地域の関わりや歴史、食文化の継承・普及啓発を図り地域活性化に取り組んでいます。

【静岡県伊東市】



富戸漁港

静岡県伊東市は、古くからイルカ等の小型鯨類の捕獲が盛んであった。

伊東市史及び伊東漁業史によれば、いるか漁の発祥は江戸時代以前からのものと言われており、操業の記録は古文書などによって伝えられている点では、イルカ追い込み漁として名高い川奈・富戸地区より湯川・松原地区の方が早く始まり、かつ盛んであったと記されている。

また、市内にある井戸川遺跡から、15世紀末から16世紀前半にかけて食べられたと見られるイルカの骨が大量に見つかっており、歴史・文化の観点から、伊東市とイルカの関わりが古くからあったことがわかるが、平成16年を最後にイルカの捕獲はされていない状況である。

【和歌山県岩出市】



文部科学省では、毎年1月24日から1月30日までの1週間を全国学校給食週間と定めています。

岩出市では、この週間中、市内小中学校の学校給食として全国各地の郷土料理を取り入れた献立を提供しています。その中で和歌山県の郷土料理のひとつとして、和歌山県太地町で加工された鯨肉を「鯨の竜田揚げ」として児童生徒に提供しています。また、小学3年生を対象に、「郷土料理について知ろう」をテーマに、「鯨の竜田揚げ」を食育の授業で紹介しています。

郷土料理についての授業風景

【和歌山県串本町】



河内祭

串本町は本州最南端に位置し、漁業と共に発展してきた町です。江戸時代には、紀州藩の鯨方がおかれ、古式捕鯨で栄え、また明治には近代捕鯨で栄えました。

現在、その文化は祭りとして受け継がれ、毎年7月に催される「河内祭」は国の重要無形民俗に指定されています。その祭のハイライトは豪華に装飾された鯨舟の渡御であり、かつて捕鯨がこの地域の生活を担う産業であったことを物語っています。

また、平成28年4月に近隣市町（串本町・太地町・新宮市・那智勝浦町）の捕鯨文化に関する事柄が日本遺産に認定されました。

【和歌山県太地町】



太地浦捕鯨絵図

紀伊半島の南端に位置しています「日本捕鯨発祥の地」太地町は、現在人口は、約3,200人、総面積5.81平方キロメートルで全体が熊野灘に面した小さな町です。

この町には、鯨と共に生きる町として、古式捕鯨から近代捕鯨時代に至るまで数多くの町民が捕鯨に従事し、輝かしい歴史と悲しい歴史とを繰り返してきました。その捕鯨の歴史・文化は、捕鯨史跡として町の処々にみられます。

先人達の築きあげた歴史・文化があり、その誇りを今もなお引き継ぎ、この貴重な遺産を次世代に正しく伝え保存し、過去・現在・未来と鯨に関わっていき、今後も「捕鯨技術」「伝統」「鯨文化」「鯨食文化」を守っていきます。

【和歌山県北山村】



観光筏下り

北山村は、紀伊半島の中央部に位置し、和歌山県でありながら、南は三重県、北は奈良県に囲まれた全国唯一の飛び地の村です。

北山村には紀州材を筏に組んで運ぶ筏師の村として600年の歴史と伝統技術があり、現在は観光筏下りとして、毎年の乗船客が5000人を超える観光事業となっています。

また、「じゃばら」という全国唯一の特産品があります。じゃばらは、ゆずやすだちの仲間の柑橘類で、花粉症を抑制する効果がPRされると売り上げを伸ばし、現在は村を支える産業となっています。

【大阪府堺市】



「堺出島浜鯨祭り復活の会」提供
(2011年7月24日)

堺市は、大阪府の中央部に位置する人口約84万人の政令指定都市です。

古代には仁徳天皇陵古墳をはじめとする百舌鳥古墳群が築造され、中世には海外交易の拠点として「自由・自治都市」を形成し、わが国の経済、文化の中心地として繁栄してきました。

このように歴史の古い堺市は、鎌倉時代末期に堺出島沖に鯨が出現した時の故事にちなんだ堺出島浜鯨祭りや、堺出身の歌人と謝野晶子が鯨の現れた様子を詠んだ歌を残すなど、歴史文化的に鯨との関わりがあります。

現在、堺市では百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録に向け、ユネスコへの今年度の国内推薦を目指して取り組んでいます。

【山口県下関市】



市内長府関見台にある鯨館

下関市は古くからくじらとの関わりが深く、今から2千年（弥生中期）前の吉母浜（よしもはま）遺跡から、くじらの骨でできた「あわびおこし」が出土しています。中世に入り、源平最後の合戦となりました1185年の壇ノ浦の戦いでも、イルカが登場しますが、江戸時代、北前船の寄港地であった下関では、長州捕鯨で捕獲された鯨肉、鯨油等の中継基地の役割を担っていました。

その後明治に入り、日本で初めての近代式（ノルウェー式）捕鯨会社「日本遠洋漁業株式会社」が、1899（明治32）年に設立され、長門に本社、下関に出張所を置いたことから、下関は近代捕鯨発祥の地と呼ばれています。

下関はその後、戦前戦後を通じた南氷洋捕鯨基地、鯨肉の流通・加工基地として、くじらが水産都市・下関発展の一翼を担ってきましたが、商業捕鯨の一時停止後、下関の捕鯨産業も衰退することとなります。

そこで現在、下関が誇る「くじら文化」を次世代に引き継ぎながら、かつての賑わいを鯨で取り戻すため、「日本一のくじらのまち」を目指し、年間12回の鯨肉給食の実施や、長門市等と連携した「くじら文化発信事業」に積極的に取り組んでいます。

【山口県長門市】



鯨墓



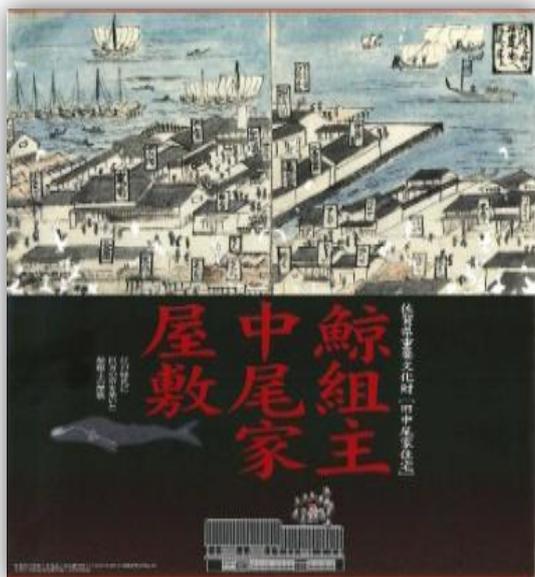
鯨鯢過去帳

長門市には、鯨に係る国指定文化財として、古式捕鯨用具、鯨墓、早川家住宅、県指定文化財として、鯨位牌、鯨鯢過去帳があり、これらは全国的にも著名です。

また、通、仙崎、黄波戸、津黄・立石、川尻の5地区に古式捕鯨地があり、それぞれ200年以上の歴史があります。特に川尻地区の古式捕鯨は、歴史を物語る川尻捕鯨調書が残存しており、そこには元禄11年から212年間に渡って捕獲した鯨の種類や捕獲した月日等が詳細に記録されており最後の古式捕鯨地として知られています。

また、鯨への報恩感謝の気持ちからつくられた鯨墓や捕鯨の行われなくなった現在も続く鯨回向等、鯨への慈しみの文化がそれぞれの地区で継承されています。

【佐賀県唐津市】



玄界灘を臨む港町である佐賀県唐津市呼子町は、古代より海上交通の要衝として知られ、江戸時代には唐津藩の重要港湾となり、漁業基地や海運・流通の拠点として発展してきました。

唐津藩の重要な産業であった捕鯨業は、唐津藩の財政と領民の生活を潤す基幹産業として発達し、中でも中尾家は八代にわたり鯨組主として活躍しており、その繁栄振りは「中尾様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」と童謡で謡われるほどだったそうです。

その後、明治時代に入ると中尾家は捕鯨業から撤退してしまいましたが、現在でもその屋敷は受け継がれ、「旧中尾家住宅」は佐賀県の重要文化財に指定されています。

【長崎県壱岐市】



納屋場背美鯨切解図

壱岐は古代から続く歴史の島であり、鯨との関わりも古代から続いています。

弥生時代の遺跡には鯨骨を材料とした道具が出土し、飛鳥時代のものとされる線刻画には捕鯨の様子が描かれ、捕鯨業の萌芽が見られます。

江戸時代には壱岐は捕鯨の中心地として、『鯨組』と呼ばれた捕鯨集団が活躍しました。彼らは組織的に活動する大企業であり、とある捕鯨船団では56隻853名を擁し、さらにセミクジラ1頭を捕獲するたびに、155人の日雇いが発生したとの記録が残っています。

『鯨組』は漁船や漁具の改良に熱心であり、また遠方から人を呼んで技術取得にも努め、その影響は捕鯨のみならず漁業全般の向上に広く寄与しました。

【長崎県平戸市】



司馬図複合

平戸瀬戸東岸には、日本で最古の（BC4000年）石銚を用いた捕鯨の遺跡である「つぐめの鼻遺跡」がある。江戸時代始めには紀州(きしゅう)から進出した突組が突取(つきとり)法を伝えるが、平戸の町人も捕鯨業に参入し、17世紀中頃には平戸系突組が西海漁場で主導的な役割を果たしている。延宝5年(1677)には紀州太地で網掛(あみかけ)突取法が発明され、直後に西海に伝わり、平戸市域でも的山大島の井元(いのもと)組や生月島の益富(ますとみ)組が導入するが、益富組は江戸時代後期、生月島、壱岐、五島灘で5組を操業する日本最大規模に発展している。明治～昭和初期の平戸瀬戸では、銃で炸裂弾(さくれつだん)を打ち込んで鯨を捕獲する独特の銃殺法が行われている。

【長崎県新上五島町】



有川郷の海童神社
鯨のアゴの骨

新上五島町有川湾では、江戸時代初期から江口甚左衛門正明が紀州古座の三郎太郎とともに鯨突組を営み、有川村に10組、魚目村に8組あったと記録されている。

江戸幕府が1661年五島列島に新たに富江藩を作ったことから有川湾を挟んでの海峡問題が持ち上がった。また、1666年に海境の杭を打ち、魚目漁場と有川漁場に分けたことから、ますます紛争の根を残すこととなった。

ようやく1693年に有川の江口甚右衛門正利が幕府の支持を得て有川鯨組を興し、捕鯨数を増やし村の経済的基礎を築き上げていった。しかしながら、1884年有川鯨組がその長い歴史を閉じ、これを五島捕鯨株式会社が引き継いで銃殺捕鯨を操業。1909年東洋捕鯨株式会社が五島捕鯨株式会社を吸収合併し、有川を基地としてルウI-式捕鯨の操業を開始した。

最盛期の昭和30年代には捕鯨従事者は900人を超えていたといわれ、その仕送りによって島の経済は潤された。現在も新上五島町から11名が調査捕鯨に従事している。

【長崎県長崎市】



江戸時代、長崎県下には壱岐、対馬、五島、平戸など各地に捕鯨漁場があり、鯨組による捕鯨が盛んに行われていました。捕鯨漁場からも近く、出島貿易で栄えた長崎市には、裕福な人々が暮らしており、高級で美味しいとされる部位が届けられていたと言われています。このような背景から、長崎市では正月や結婚式などお祝いの席で鯨が食べられるほか、街中には「くじらあります」の暖簾を下げた鯨肉販売店や居酒屋が多く存在し、今も鯨食文化が根付いています。また、食文化だけでなく、マッコウクジラの歯を削って作られる工芸品や鯨にまつわる祭りなど、鯨と深く関係している文化が多く見られます。

【長崎県東彼杵町】



鯨肉の入札会

東彼杵町と鯨の関係は深く、江戸時代までさかのぼります。長崎街道の宿場だった彼杵宿は、平戸街道の起点と交わり、さらに港の機能も備えていたことから、人とモノが行き交う交通の要衝でした。そこに目を付けたのが、九州初の鯨組を形成した深沢儀太夫勝清です。五島灘で獲れた鯨肉を彼杵港に陸揚げすると、街道を通じてたちまち九州各地へ流通しました。彼杵宿は鯨肉取引の中心地となり、大いに栄えました。「くじらの町」として今も食文化は色濃く残り、希少になりつつある鯨肉ですが、地元ではいつもの食卓や飲み会に並び、広く親しまれています。また、町内では鯨肉の入札会が毎月行われ、昔ながらの光景を見ることができます。日常に、鯨があります。

【沖縄県名護市】



浜辺に追い込んだピトゥを仕留める
古波蔵眞一郎氏撮影

沖縄県名護市では、コビレゴンドウ等の小型の鯨は「ヒートウ」と呼ばれている。かつて、3月から5月にかけて数十～200頭のヒートウの大群が名護湾沖を回遊していた。これを沖合から湾内の浅瀬に追い込み、男たちが浜近くで銚子を手に格闘しながら射止めるヒートウ狩りが行われていた。近年は、沖縄県においては名護漁業協同組合所属の6船が突棒によるいか漁業を許可されており、毎年数十頭のヒートウを水揚げしている。名護市はヒートウの街として県民に親しまれており、飲食店ではヒートウ炒め等のヒートウ料理が提供されている。

その他の加盟自治体

北海道函館市
東京都小笠原村
石川県能登町
三重県熊野市
和歌山県田辺市
和歌山県新宮市
和歌山県古座川町
和歌山県那智勝浦町
高知県室戸市
鹿児島県いちき串木野市
鹿児島県阿久根市

全国鯨フォーラム開催の歩み

2002年 3月21日	第1回日本伝統捕鯨地域サミット	山口県長門市
2003年 5月11日	第2回日本伝統捕鯨地域サミット	長崎県生月町
2004年 5月30日	第3回日本伝統捕鯨地域サミット	高知県室戸市
2005年 5月15日	第4回日本伝統捕鯨地域サミット	山口県下関市
2006年 4月23日	第5回日本伝統捕鯨地域サミット	和歌山県太地町
2007年 7月 8日	全国鯨フォーラム2007石巻	宮城県石巻市
2008年 5月31日	全国鯨フォーラム2008新上五島	長崎県新上五島町
2009年10月10日	全国鯨フォーラム2009釧路	北海道釧路市
2010年11月 7日	全国鯨フォーラム2010名護	沖縄県名護市
2011年10月29日	全国鯨フォーラム2011唐津	佐賀県唐津市
2012年 6月 9日	全国鯨フォーラム2012下関	山口県下関市
2013年11月16日	全国鯨フォーラム2013南房総	千葉県南房総市
2014年11月21日	全国鯨フォーラム2014長崎	長崎県長崎市
2015年11月15日	全国鯨フォーラム2015網走	北海道網走市
2016年 5月31日	全国鯨フォーラム2016東京	東京都千代田区